

難民 REFUGEES

2001年第2号 (通巻121号)



難民と
援助職員が
危険に
さらされて
いる

援助の
代償は
高すぎるのか？



UNHCR

国際連合
難民高等弁務官
事務所

「見えない盾」がなくなっていく...

援助の仕事には常に危険がつきものだった。しかし長年、人道援助職員の大半が「見えない盾」とでも呼べるものによって、職務に伴う危険から守られていたようだ。

戦闘が続く間も援助職員は比較的安全に活動に従事でき、銃声がとどろく中でも被害を受け

を得るための標的にもなった。

当事国・関係各国や諸機関は状況の悪化に気づいていたが、そろって長い間、現実から目をそむけ続けた。こんなことはありえない、今回だけだ、事態はよくなる、と。

避難民や援助職員の犠牲者数が不安を抱かせるほど増え、国際社会がやっと状況の改善を真剣に考えるようになった。

UNHCRと民間機関が現場活動の再検討を早急に開始した。コフィ・アナン国連事務総長が全世界的な安全対策に対する資金拠出の大幅な増加を求め、安全は「贅沢」ではなく、人命を救うための事業の継続に必要なものだと言った。

しかし、このような措置が実施されても、世界の人道活動状況の改善に向けて不確かな一歩が踏み出されたにすぎない。

さらに複雑で取り組むべき問題がたくさんある。現在最低限の保護しか受けていない、世界中で膨大な数になる国内避難民と呼ばれる人々を、どうしたら効果的に保護できるのか。最も危険な仕事に従事することが多いにもかかわらず、危機的状況下で最低限の支援しか受けられない援助機関の現地職員の安全はどうしたら守られるのか。援助機関は必要な後方支援確保のために、中立性や安全を損なうおそれがある。軍と協力すべきか、といった問題だ。

難民が最も援助を必要としているまさにその時、援助職員が最も身の危険にさらされている。これらの問題の多くが解決されない限り人道機関の事業は阻害され、故郷を追われた数百万の人々が、受けるべき援助を受けられない。



アフリカ中央部のルワンダ難民（写真）のような故郷を追われた人々や、人道活動に従事する職員らの安全確保が、過去10年間に非常に難しくなった。

© S. SALGADO

た不運な市民を援助できる、という暗黙の合意に世界中の紛争当事者が事実上達していた。一片の善良さ、一分の礼節が感じられた時代だった。

冷戦の終結と共に状況は一変した。国際社会は個人の自由が広がり社会が進歩する時代の到来を期待した。ところが超大国が均衡していた時代が終わると、民族、宗教などの対立による険悪な紛争が次々に起きた。かつて存在したルールは、それまでの約束事を意に介さない者たちによって放棄された。

民間人が意図的にテロの標的にされたり、政治的取り引きの最後に人間の駒（こま）として使われ出した。援助職員は対立する勢力の双方から「味方」や「スパイ」と見なされるようになり、また政治的・軍事的あるいは物質的利益



編集者: Ray Wilkinson
寄稿者: Panos Moutzias, Jennifer Dean,
Robyn Groves, Jeffrey Meer,
Bemba Donkah, Andrew Painter,
Rachel Goldstein-Rodriguez,
Nanda Na Champassak, Nazli Zaki,
Diana Goldberg.

編集アシスタント: Virginia Zekrya
写真部: Suzy Hopper, Anne Kellner
デザイン: WB Associés - Paris
制作: Françoise Peyroux
総務: Anne-Marie Le Galliard
配本・発送: John O'Connor, Frédéric Tissot
地図・衛星画像: UNHCR - Mapping Unit

日本版
翻訳協力: Scott Bunnell, 多田倫子, 川島敏邦,
前田真理子
コンテンツ・トランスレーション
編集・総務: 日本・韓国地域事務所 広報室

『難民Refugees』誌は、UNHCR(国連難民高等弁務官事務所)ジュネーブ本部・広報部と東京にある地域事務所が発行する季刊誌です。寄稿記事に表わされた意見は、必ずしもUNHCRの見解を示すものではありません。また図示された国境の表示は、各領土およびその政府当局の法的立場に対するUNHCRの見解を表明してはおりません。

掲載記事の編集権はUNHCRにあります。掲載記事・写真のうち、著作権©表示のあるものの転載・複製は一切できません。また©表示のない写真の使用については、下記のUNHCR事務所までお問い合わせください。

本誌の日本語版制作協力: (株)コンテンツポラリー、英語版および仏語版制作協力: ATARSA(スイス)。本誌の発行部数は、英語、仏語、ドイツ語、イタリア語、日本語、スペイン語、アラビア語、ロシア語、中国語の各国語版を合わせ22万6000部。

発行: UNHCR日本・韓国地域事務所
〒150-0001
東京都渋谷区神宮前5-53-70
国連大学ビル6階
TEL 03-3499-2310
FAX 03-3499-2273
ホームページ
<http://www.unhcr.or.jp>
業務時間: 月曜～金曜日
9:30～17:30
(昼休み12:30～13:30)
日本語版発行: 2001年8月

表紙: デンマークで行われた安全訓練を受ける援助職員。
UNHCR / R. WILKINSON

UNHCR ジュネーブ本部
P.O. Box 2500
1211 Geneva 2, Switzerland
www.unhcr.ch

難民 REFUGEES

2001年第2号(通巻121号)



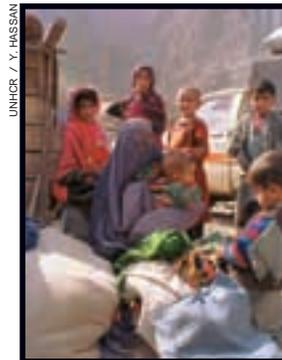
UNHCR / A. HOLLMANN

4 長い間、援助職員は比較的安全に仕事ができる。今日、人道機関職員や難民の働く環境や個人の安全が著しく脅かされている



UNHCR / A. MAHECIC

22 今や通常の人道援助活動でさえ非常に危険だ。援助職員や難民に対する略奪や殴打などの暴力行為が増加している。



UNHCR / Y. HASSAN

28 アフガン難民は、今だに世界最大の難民グループだ。21年間続く内戦に加えて、ひどい干ばつが人々をさらに苦しめている。

2 編集部から

●援助職員を守る「見えない盾」は、この新しく危険な時代に消えてしまった。

4 特集

●人道機関は、職員と難民に対し増加する暴力に対策を検討している。

レイ・ウィルキンソン

●ブルンジ
安全な視察が一転、死に直面
クリストフ・ハム

●ウラジオカフカス
一年近く拉致されていた

●現場からの声
原則、任務、そして命を守る新たな方策
キリアン・クラインシュミット

●難民キャンプ
難民キャンプの悲惨な毎日

●ゴマ
ザイル(現コンゴ)東部で政府軍と反乱軍に包囲されて
パノス・モームツィス

●ティモール
「次の任地は、熱病と凶暴な兵士がいらない熱帯の島と願いたいね」

22 危険な仕事

●暴行、死の脅迫、強盗、レイプ 現場での日常的な危険が、外の世界に知られることはまずない。

27 ボランティア活動

国連ボランティア計画が派遣する専門家たちが、世界各地で援助活動をしている。

27 アフガニスタン

さらなる内戦、そして新たな危機。
ユスフ・ハッサン

30 People and Places

●ひと

31 Quote Unquote

●ひとこと



もう

援助職員の安全が脅かされている。
1999年にはジュネーブのUNHCR本部が
クルド人のデモ隊に一時占拠された。
スイス政府はUNHCR本部とその近くの
国連欧州本部に有刺鉄線を張り巡らし、
兵士を配備した。

限界に近い

相次ぐ殺害事件の後、各人道援助機関は援助の代償について苦悩している

レイ・ウィルキンソン

フランソワ・プレジオーシが同僚の国連職員と、コンゴ東部の町ブカブ近くに難民の様子を見に出かけた。当時情勢は緊迫していた。この地域のUNHCR事務所の所長であったイタリア人プレジオーシは、当局と自分の担当するルワンダ人難民との間にある問題をなんとか取り除こうと腐心していた。地元出身の運転手が自動小銃やナタで武装した男たちが茂みに隠れているのに気づいた時も、国連職員たちは人道活動をしている以上問題が起きるはずがない、と安心していただろう。何といても援助に携わる職員は世界各地の紛争地で長年活動してきており、たいしては、紛争当事者間にある非公式の合意によって、援助活動を続けることができていた。

運転手のヨゴレロ・ジョルジュ・コルネイユの目撃証言に基づく公式の電報が、その後の出来事を語る。「500メートル行った所で車がコンゴ人とツチ族難民の一団に止められた。車は取

6ページに続く



援助職員の安全問題は最近国際的に論議されているが、難民も戦闘当事者の攻撃目標となってきた。写真はザイル（現コンゴ）の町キサンガ二近くのルワンダ難民（1997年）。

り囲まれた。コンゴ人は自動小銃を、難民はナタとやりを持っていた。武装集団が大声を上げ始めた。白いハンカチを振って、ヨゴレロが最初に車から降り、乗せているのは難民の援助に来ている職員だと説明した。集団は彼に黙るよう命じ、コンゴ人5人が車を調べた。ほかのふたりがプレジオーシともうひとりの国連職員ブリーケを調べた」

「暴漢たちはあらゆる武器、特にナタで彼らを殴り始めた。『君たちを助

けに来ただけだ』とブリーケが叫んだ。ヨゴレロはだれも彼に注意を向けていない隙に逃げ出したが、暴漢のひとりに左腕をナタで切りつけられた。逃げながら自動小銃で狙われているのが分かった。12回発砲された」。運転手のヨゴレロはようやく逃げのびたが、ヨーロッパ人ふたりは殺された。

1964年8月に起きたこの事件でプレジオーシは、その14年前に世界の難民を援助するために設立されたUNHCRで殉職した最初の役職者となった。こ

の殺害事件は、援助職員が活動している極めて危うく矛盾した状況を、この早い時期にすでに明らかにしていた。

人道活動に携わる人々、すなわち国連や赤十字の職員、民間や非政府組織の職員の安全は、基本的にはすべての紛争当事者が援助職員の中立性を尊重するという、暗黙の合意に多くの場合頼っていた。しかしある当事者グループがこの合意を無視した場合、職員は最悪の危険にさらされることになる。

プレジオーシとブリーケの殺害は



る大量殺りくの脅威に集中していた。大国に依存する中小国の問題はたいてい抑制されていた。冷戦が終結し、核戦争の脅威が遠のくと、世界の政治家の中には平和が続き、経済が繁栄すると言う者もいた。

ところが長い間抑制されていた民族・宗教紛争が爆発した。その多くが国家間の戦争ではなく内戦だった。人道活動のルールや援助を必要とする人々の運命が大きく変化し始めた。それまでは各国政府が基本的に難民と援助職員の安全に責任を持っていた。

しかし新しい形の紛争では、各国政府はしばしば無力だったり、時には援助の介入を拒否したりした。援助職員と難民は、偶然の事故の犠牲となるよりも、紛争当事者の意図的な目標となった。

UNHCRの現地職員はたいてい紛争地域の周辺で、安全な庇護国へたどり着いた難民の援助活動をしてきた。しかし1990年代には、北部イラク、バル

カン地方、中央アフリカなどの多くの場所で、紛争のまっただ中で働き始めた。

民間の援助機関の数も急増した。これらの援助機関の職員は遠く離れた最も危険な地域で活動し、大きな国際機関が職員に与えるような保護もないまま、標的となる機会が増えていった。国際赤十字委員会も長年危険な紛争地域で活動してきた。しかしこの組織もまた、状況の悪化、意図的に狙われる職員数の増加を指摘している。

それでも国際社会による援助は紛争地域で歓迎されていたが、それはしばしば間違った理由からだった。援助機関は何十万という避難民を救済できる唯一の機関だった。そして援助機関の車両、食料、無線機材などの物資が、もうけを生み出す戦利品となった。ある援助活動での横柄な少年兵士たちのことを、援助職員がうまく表現した。「AK47ライフルは彼らにはクレジットカードみたいなものです。欲しいものが何でも手に入るのだから、使うのをためらいません」

人道活動に携わる
人々の安全は多くの場合、
すべての紛争当事者が
援助職員の中立性を
尊重するという、
暗黙の合意に頼っていた。

悲惨な結果もありうる。



少なくとも当時は こうしたルールの例外に過ぎないと思われていた。このような保護に関する了解が、20世紀後半を通じて、難民や他の国内避難民の数が100万人程から何千万人に急増しながらも、たいていの場合機能し続けた。

破られた合意

夜明けが来ると 実は偽りの夜明けだったが 世界が希望を抱いた。皮肉にもその時期、この了解が無惨にも破られ始められた。超大国が対立していた時代、世界の恐れは核兵器によ

暗闇への旅

それは単純な視察任務の筈だった...

クリストフ・ハム

ブルンジ奥地の仮設避難民キャンプに着いた時、あたりは平穏に見えた。

現地視察に訪れた我々、国連職員6人と地元政府職員3人は、集会所前に車を止めた。日陰には女性たちが集まり髪を編んでいた。

突然、銃声が響き、ぼろぼろの軍服を着た兵士達が突進してきた。

「車に戻れ！」同僚が叫んだ。後部座席に倒れ込み、車体を貫通する銃弾の音を聞いていた。気がつくやうに頭から首に生暖かい血が流れて落ちていた。

ショック状態の人は痛みを感じないと聞いたのを思い出していた。そのうち痛みや失神、あるいは死が訪れると覚悟した。しかし何も起こらなかった。ただ、口が無性に乾いていた。

車から這い出すと、サスキアが後輪にもたれうずくまって泣いていた。腹ばいになって車の下をのぞくと、ブルンジの職員がまだ動いてはいたものの息をひきとろうとしていた。横には若い女性の死体があった。

「自分はなぜここにいなきゃならな

いんだ。これは軍事作戦じゃないか」。こう考えたことくらいしか覚えてない。そして「死ぬとはこういうことなのか。ぶざまで汚く苦しい。英雄的でも理想主義的でも何でもない」と思った。

武装した兵士達は、我々(ルイス、サスキア、私、キャサリーン、ガイ、レオカディヤ)を集めて家の壁際に座らせた。

私のサングラスは頭から滴る血でよごれていた。ひどい頭痛がして、気を失うのが怖かった。我々の車が黒煙をあげて燃え上がり、爆発の音も聞こえた。完全武装の兵士が30人ほどいた。

非常に若い兵士もいた。16歳前後に見える少年兵達はとりわけ騒がしく、私に向かってわめき立てた。ひとりがサスキアの眼鏡をとり上げた。彼女は周りが見えなくなってしまった。私が説得し眼鏡は返させたが、ブーツは返さなかった。「靴さえ取られてしまった」と信じられないように彼女が言った。これが彼女の最後の言葉だった。

兵士達は引き揚げはじめた。何か爆発したが、その以上のことはよく思い出せない。すぐ近くで大きな銃声が

した。私は飛び上がって走った。3人の同僚の右側を追い抜き、建物の角を曲がった。

犠牲者

ふり返るとサスキアが身体の左側を下にして倒れ、ブロンドの髪から血が流れ出していた。ルイスがその横で死んでいた。

その直後、国連の同僚、ガイが走ってきた。「終わりだ」と彼に向かって言った。あの時私は死を感じていた。それは底知れぬ恐怖と暗い虚無だった。ガイはいったんいなくなったが、驚いたことに別の同僚ふたりとすぐに戻ってきた。

彼が「走れ！」と叫び、我々は走った。いつ背後から撃たれるかとおびえながら、市場を突っ切り、斜面を下り、道路を横切った。そして、岩陰に隠れた。そばを村の少年が、ビニールのサンダルを手に持って這って行った。我々も彼の後を這っていった。

レオは胸を負傷してそれ以上走れなかった。私は彼女を抱きかかえ、かなり遅れてガイとキャサリーンを追った。最初にたどり着いた家で農夫の一家が我々に水をくれた。私はかなり失血していて、体力も気力も限界だった。

悪化する状況

国連の平和維持活動の増減が、思わぬ影響を人道機関に及ぼしたこともある。設立後の40年間、国連には13の平和維持任務があった。その数は1980年代後期から1990年代初期に劇的に増え21となった。兵士・職員すべてを危険にも「国連」として考える一部の戦闘員にとって、武器を持った兵士とその近くで働く援助職員の違いが分かりづらくなった。

1990年代中期のソマリア紛争の後、平和維持活動の数が再び減少した時には、人道活動もそのあおりを受けた。世界中の危機で、撤退する兵士たちの代わりに、たとえ個人的な危険を背負

ってでも「何かをやらないと」という途方もなく大きなプレッシャーがあった。

襲撃の回数もふえた。世界的に大き

「AK47ライフルは少年兵士たちにとってクレジットカードみたいなものです。欲しいものが何でも手に入るのだから、使うのをためらいません」

く報道されたものもあった。1996年にチェチェンの病院で働いていた赤十字職員6人が惨殺された。1997年にはフ

ランスの非政府組織(NGO)職員カリーン・マンさんがタジキスタンで殺された。1998年にはUNHCR職員パンサン・コシュテルが約1年間、誘拐・拘禁された。1999年にはいつも平穏なジュネーブでさえ、クルド人活動家がUNHCR本部と、隣接する国連欧州本部の一部を占拠した事件は衝撃的だった。スイス軍がビルルの周りに有刺鉄線を張り、新たな攻撃に備えて、兵士を配置した。

ほとんどの事件がへんぴで危険な紛争地域で起こり、メディアには取り上げられなかった。だがあらゆる援助職員たちが連日のように悩まされるようになっていた。空爆、性的嫌がらせ、



UNHCR / F. DEL MUNDO

難民キャンプの状況は困難で危険なことが多い。不安げな人々に囲まれて、本部と無線で連絡をとる援助職員

レオを木の下に残してきたので、農夫たちと戻って見たが見つからなかった。木を間違えたのだ。再び銃声が炸裂したので、農夫は早く逃げろと言った。ガイとキャサリンに追いつき、川を渡った。そこでようやく助かったと思った。

村人達が畑から次々に現われたが、だれも話しかけてこなかった。男達はうつろな視線を向け、女達は恐れと哀

れみの目で私の血染めの服を見つめた。家族を失ったり、我々のように死んだ友を残して家から逃れる人々と一緒に草原を越えて歩いたことを私は決して忘れない。

いくつかの砂糖きび園を通り抜けて、我々は安全な場所にたどり着き、屋敷につれていかれた。タンザニアの平原を見渡す美しい庭園、日の光、鳥がいて大木の枝々がある。生きている。

殴打を受け、銃で脅され物品を強奪された者もいた。事務所が襲撃され、時には略奪が起こり、職員が人質に取られたりした。ある援助職員は、自殺しようとした錯乱状態の庇護希望者に、危うく道連れにされるところだった。危険要因があまりにも増えたせいで、援助活動を中止し、援助すべき人々を危険な状態に残し、現場の職員が西ティモール、コンゴ、中央アフリカ（18ページ）といった地域から撤退した。

日常的な危険

予測不能の結果をもたらす危険要因が援助職員の日常にあふれるようになった。混雑した難民キャンプの劣悪な

職場環境にさらに加った、個人に対する新たな脅威にうまく対処できないと感じる職員もいた。問題が起きそうだと

職員らはスパイか、
あるいは単に
「敵」とみなされた。

という危険信号に対し無関心を装うか、あるいはわざと無視するような職員もいた。職員への心理的影響は大き

く広がっていた。ガイは軍隊と一緒に、サスキア、ルイス、ブルンジ人副工場長の3人の遺体を収容するために戻って行った。そして、農夫達に助けられたレオも連れ帰ってきた。診療所でレオは傷の手当てをされ、ガラスや銃弾の破片が私の頭の傷から取り除かれた。

我々は機内の通路に置かれた袋の中にある友人たちの遺体と共に、帰路についた。

命のともしびが消えるのは本当にあつけない。我々生残者は、あの日死の暗闇の中に片足を突っ込んでいた。この経験は我々につきまとうだろう。そして暗闇の彼方へ消えた仲間達を思い、悲しみが続く。

1999年10月12日 ブルンジにて

*ルイス・ズニガUNICEFブルンジ駐在代表 / サスキア・ファン・マイヘンフェルトWFPブルンジ事務所後方支援担当主任 / クリストフ・ハムUNHCR帰還担当官 / キャサリン・クラベロ=クリストファーソンUNDPブルンジ駐在代表 / ガイ・ワーゲンヘーレUNDP安全担当官 / レオカディ・ニビジUNDPプログラム補佐

く広がっていた。

2000年9月、UNHCRの50年にわたる人道活動史上、最悪の事態が起きた。9月6日、よく統制の行き届いた民兵の一群が、西ティモールのUNHCRアタンブア事務所を突然に襲い、職員3人を切り殺した。アメリカ人保護官カルロス・カセレス（33歳）、エチオピア人補給担当官サムソン・アレガヘン（44歳）、クロアチア人無線通信員ペロ・シムンザ（29歳）だった。

彼らの遺体は通りに引きずり出され、焼かれた。この惨劇の少し前、カセレスが友人に不吉な電子メールを書いた。「我々は餌のようにここに座っている。武器もなく、攻撃されるのを



援助職員のための安全訓練では、反乱軍が人道機関の職員を襲撃する場面を想定した模擬訓練が行われる。

ただ待っているだけだ。男たち(民兵)は考えもせず行動し、私が部屋にいる蚊を殺すように簡単に人間を殺す」。彼の最後の言葉はこうだった。「もう行かなくては、外で悲鳴が聞こえる」

数日後、遠く隔たった西アフリカ、ギアナの町マセンタが急襲され、現地UNHCR事務所のメンサ・クボン所長が武装した暴徒らに殺された。もうひとりの職員、サブ・ローレンス・ジェヤは数日間、拉致された。

「もう言葉もない」と緒方貞子高等弁務官(当時)は述べ、「なぜ、武器も持たず、罪もない人道援助職員がこのような残酷な方法で殺されなければならないのか。助けをどうしても必要とする多くの難民を援助するためにどれだけの危険を冒すべきなのか、そして我々と国際社会は、劣悪な環境に置かれた善良な人々を守るためにさらに何をすべきなのか」と問いかけた。

自問

確かに世界はここ数年、この問題を自問し続けてきた。しかし、急激に高まりつつある脅威に対応が追いつかなかった。

「武器を持たない援助職員が、どんな軍隊も受け入れられないような危険を冒している」と高等弁務官補ソレン・ジェッセン＝ペーターセンは言う。「UNHCRなどの機関は、職員の安全と(紛争の)犠牲者が絶対必要な援助と



UNHCR / K. ROCHANAKORN

の妥協点を見い出さなければいけない。その中で、受容しうる危険の境界線を踏み越えたかも知れない。危険地域に行くように頼まれた時、遅かれ早かれ我々が、より確かな護衛がないのなら『ノー』という可能性もありうる。我々は人道活動家として、できることの限界ぎりぎりにいる」

この意見は数年前に職員の安全が問題となった時のものだ。最近のインタビューで高等弁務官補が当時と現在の状況に触れ、次のように述べた。「我々は安全性を高めようとしてきた。いくらかの進歩があった。4年前、我々がはからずも境界線を越えてしまったのは明らかだろう。我々は『ノー』と言わなかった。治安の悪化は我々の安全性を高める努力をはるかにしのいでいた。結論は『我々が他人の生命を救うのなら、我々も生きていなければならない』ということだ」

コフィ・アナン国連事務総長は、現行の安全対策が「予測できない断片的な資金提供、時代遅れで扱いにくい複雑な手続きに依存している」と認めている。

対応の始まり

治安の悪化がきっかけとなり、UNHCR内外で、援助職員の安全をどのように改善するかという論議が再開した。しかし論議で明らかになったのは、状態がどんなに危険になってしまった

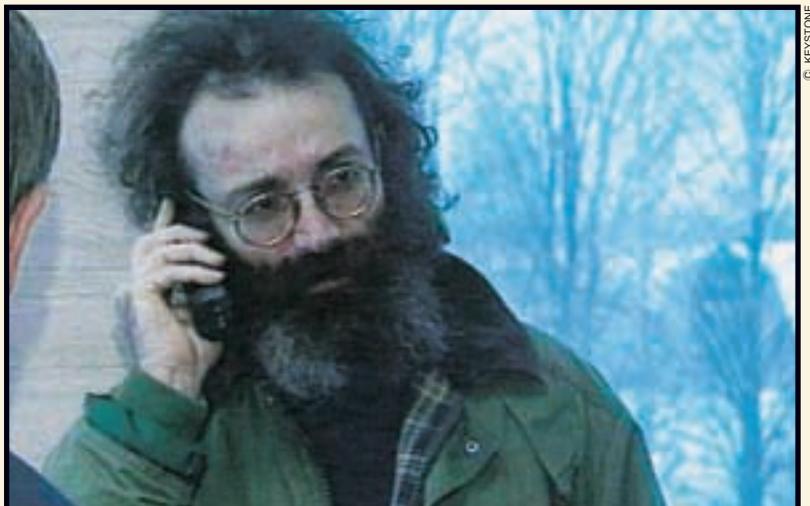
「後頭部を撃たれると覚悟した」

1998年1月、バンサン・コシュテルが、北部カフカスの都市ウラジカフカスで、自宅アパートの鍵を開けた時、2丁ずつ拳銃を持ち覆面をした男3人が、暗闇から飛び出してきた。台所の床にひざまずかされ、建物から引きずり出されるまで、首に拳銃を押しあてられた。「後頭部を撃たれると観念していた」。コシュテルが誘拐され救出されるまでの、317日間に及ぶ壮絶な苦難の日々が始まった。

フランス人のコシュテルは当時、UNHCR北カフカス地域事務所長だった。この事件は一個人の恐ろしい体験であるばかりでなく、人道援助職員が巻き込まれる安全上の重大事件がいつもそうであるように、この地域で故郷を追われた何十万もの人々

コシュテルは3日間、車のトランクに押し込められた。日常的に殴られ、拘禁されていた期間はずっと手錠をかけられたも同然の状態だった。そして何度も処刑の真似ごとをされた。一度救出が試みられたが、土壇場で失敗した。9カ月もの間ずっと地下室に閉じ込められ、太陽の光を見たのは一度だけだった。手錠と1メートルのワイヤーで鉄のベッドにつながれていた。ちょうど4歩だけ歩けた。解放後、彼は「あと1歩、とそればかり願っていた」と回想した。

ロシア軍特殊部隊による激しい銃弾戦のさなかコシュテルが劇的に解放された4日前、外国人の人質4人がチェチェンで惨殺された。これを聞いたコシュテルがまず口にしたの



© NEWSTONE

UNHCR職員バンサン・コシュテルはロシア南部で誘拐され、1年近く拘束された後解放された。このような出来事は援助職員らの生命を脅かすだけでなく、一般市民のための支援計画に支障をきたす。

を援助しているUNHCRや他の人道的活動の進行に、深刻な影響を与えた。国際機関や西側の諸機関は、進行中の紛争に深くかかわりすぎないよう慎重になった。

が、「私が助かって、ほかの人達がだめだったのはなぜだ」という言葉だった。家族のもとでしばらく静養した後、コシュテルは再びUNHCRの人道援助活動に復帰した。

か、そして前向きな対応がどれだけ欠如しているかだけだった。

2000年10月の報告書で、アナン国連事務総長は、1992年1月以来、計198人の国連の文民職員が殺害され、さらに240人が誘拐、もしくは人質になったと報告した。しかし犯罪者たちが裁かれたのは、たった3件だけだった。またボランティア機関の国際連盟は、数しれないNGO(非政府組織)の職員が同じ期間に殺されていると発表した。

国連職員の安全を担当するベノン・セバン国連事務次官が、加害者は事実上、刑罰を受ける恐れなく国連職員を襲うことができる、と述べている。「我々は上等のたやすい標的だ。護衛もないのだから。文民職員は平和維持

「職員の安全は贅沢ではない。

必要不可欠なものだ。

安全の確保に

費用がかかるのは当然だ」

活動が始まる前から現地にいる。そして平和維持軍がとどまるには危険すぎると誰もが考える状況になった後も現地に残る」

しかしアナン事務総長が言うように、現行の安全計画は20年前の穏やかな状態に合わせて作られたものだ。例えばセバン国連事務次官の事務所では、7万人の国連職員とその家族、そして過半数が危険地域にある150以上の

海外現地事務所で働く現地職員たちの安全を、8人のスタッフが管理している。

暗雲がたれ込めつつあるにもかかわらず、1998年にアナン事務総長が国連職員への安全訓練を援助するために設立した基金に寄付したのは、たったの4カ国だけだった。日本が100万ドル、フィンランドが10万2000ドル、ノルウェーが10万ドル、小国モナコが8500ドルだ。

最近の殺害事件の直後、アナン事務総長はUNHCR職員に向けてのジュネーブでの演説で「職員の安全は贅沢ではない。必要不可欠なものだ。安全の確保に費用がかかるのは当然だ」と述べた。

職員らも同意見だった。高まる懸念



サラエボ 安全面での懸念に加え、現地での職場および生活環境は極めて厳しいことが多い。

「再考すべき時」

キリアン・クラインシュミット

自分が安全について思いをめぐらす時は、これまでを振り返り、初めて恐れを感じた時、自分の仕事が無意味だと思えた瞬間を思い出すようにしている。

そして、人生や仕事で自分が防ぎようもない危険を以前より多く受け入れていることに気づく。

不必要な危険を犯すもどだった、刺激や知らないことを求める気持ちは、12年間、多くの危険地域で人道主義活動に携わった後、薄れていった。それに置き換わったのは他の要素。現地に最初に入り最後まで残る、という職務上の任務や、メディア、資金拠出者や関係国への影響などだ。

こうした仕事の仕方は、戦闘当事者らがある種のルールを尊重していた2、3年前までは通用した。事件が起きてもそれは事故で、意図的に狙われたわけではなかった。超大国が必要に応じて紛争を抑制できていたので、だれが、いつ、どこで、どのように仕事ができるのかがはっきりしていた。

今日、我々の存在を示すマークや旗に、もはや敬意が払われることはない。だれが青と白の国連のマークや赤い十字を気にとめるのか。攻撃目標にならないよう、人道活動の目印をどれだけ

ひんぱんに隠さなければならぬのだろうか。我々の原則と任務に反すること、例えば軍隊の保護下でのみ活動することをどれだけ行ってよいのだろうか。

世界で最も無秩序な地域で支援活動を指揮しながら、私は毎日同じジレンマ。援助を必要としている人たちを助けることと許容範囲以上の危険に現場の職員をさらさないことに直面している。

不条理な死

この10年間に非常に多くの同僚が、単に強盗に襲われたのではなく、人道機関の職員という理由で殺された。しかし人道機関が、関係国あるいはメディアなどの外圧に応じねばならない限り、そして人道機関の間での競争が存続する限り、人道機関の仕事には危険が付きまとう。

UNHCRはすでに一連の支援基準を作成した。職員には安全訓練を行い、問題地域に安全担当顧問を派遣している。だが我々は基本的な「活動基準」と、活動上・生活上・職員の配置上必要な最低限の条件について、早急に合意をしなければならない。

注目度の高い活動は、資金、緊急チーム、警備職員、時には国連軍の保護

まで得られ、危険性が低くなる。しかし大半の職員が、忘れられた世界の片隅にある現場で働いている。

予算不足で食糧の配給量を再び減らさねばならないこと、子ども達が中学校へ行けない理由、慢性的な病気を治療する資金がない理由を現地の難民にどう説明できるだろう。

我々の多くは、ウインチもなく壊れた通信機しかついていない車両がぬかるみにはまり、救助も呼べず何日も立ち往生したような経験を持っている。事務所に1台しかないコンピュータを全員で使ったり、3台の無線機を10人で使う気持ち、5年ものの発電機がまた故障し、へんぴな場所で退屈な夜を過ごす気持ちを我々は分かっている。不十分な資金と装備しかない活動は、小さくはあるが、致命傷ともなる慢性的な不安感をもたらす。

我々は早急に、原則・任務・職員の生命を守る方法を見直さねばならない。受け入れる危険の限界と介入の条件についての合意が必要だ。資金拠出者とメディアに対しては、組織だった広報活動を行ない、確固たる態度を示す必要がある。職員だけでなく支援対象となる人々の安全のために、援助活動は必要な安全や資源が確保されるまで開始すべきでない。

と怒りを反映し、世界中の数千人の国連職員が安全保障理事会に安全上の問題を取り上げるよう求めた請願書に署名した。ジェッセン＝ピーターセン高等弁務官補も、職員は非常に暗い気分になっていてUNHCRは「その精神、任務、使命を見失う危機にあった。もう危険は御免だという雰囲気だった」と述べた。

徹底的見直し

アナン事務総長は、不十分な国連の

安全制度を徹底して整備するよう提案し、国連総会に対し2002・2003年度予算で、現地とニューヨーク本部の職員増強のため年間3000万ドルを要求した。他にも様々な意見が一斉に出された。1994年の安全協定のような既存の法律文書の強化、UNHCRや国連諸機関、非政府組織など最前線で活動する機関や組織の間の協力を推進、などといったものだ。

UNHCRはジェッセン＝ピーターセン高等弁務官補のもと、職員の安全に

関わる専門委員会を設置した。UNHCRの既存の安全対策を見直した後、ファン・アムナテグイUNHCR前監査総官が、「職員安全の改善」と題した15ページの報告書を提出し、組織の強化策を提案している。

その前文に現在、人道活動職員が働く殺伐とした情景が書かれている。「武力紛争の数が急激に（ここ10年）増えた。大半がその激しい暴力によって特徴づけられ、通常の軍隊、民兵組織、軍事的な指揮者、ゲリラそして山

「戦いの太鼓が聞こえた...」

難民キャンプの悲惨な日常生活



女性たちは、まき集めのような日常の仕事をするにも、危険を冒している。

難民の世界には暴力がつきものだ。一般市民が戦争、政治、宗教などを理由に迫害を受け、住み慣れた土地を追われる。身分証明書もなく、わずかな所持金を手に、戦場を横切り、大陸や海を超え、逃避行が数千キロに及ぶ場合もある。彼らの運命は悪徳密航業者、国境監視員、入国管理官の気まぐれにもあそばれる、一見安全そうに見える公的な受け入れセンターやキャンプにたどりついて、官僚によるいやがらせ、投獄、リンチ、レイプに遭う可能性がある。

現在UNHCRの援助対象者は2100万人以上となっており、またほぼ同数の援助を受けることの少ない国内避難民が存在する。難民・避難民の窮状がさらに悪化していないかどうか、どうしたら最善の援助が行なえるのか、など

世界中の故郷を追われた人々の大多数が直面している安全上の問題を正確に把握することは極めて難しい。

従来の定説とは異なる事実を、サラ・ケニオン・リッシャーがUNHCRの作業文書で以下のように報告している。いわゆる「政治的暴力」の被害を受けた難民の数は、主に旧ソビエト連邦・アフガニスタン間、そしてアラブ・イスラエル間の紛争が減ったことで、1987年から1998年までにおよそ800万人から430万人へと激減した。

この作業文書では「政治的暴力」を、難民と軍隊を巻きこんだ、母国や受け入れ国からの攻撃、受け入れ国内での暴力行為、国家間の戦争や難民同士の民族紛争と説明している。難民に対する、あるいは難民社会の家庭内での事

件や犯罪のような、ごく日常的な暴力は取り上げていない。

悲惨な現状

UNHCRのジェフ・クリスプ評価・政策分析課長はケニアの2大キャンプ、北西部のカクマと北東部のダダブで20万の難民が直面する安全の問題を調査した。

クリスプの32ページにわたる報告書は、様々な問題を抱える難民コミュニティ全体の悲惨な現状を克明に伝えている。国外へ脱出し、過密状態の難民「都市」で生活する重圧のため、昔ながらの社会やその慣習や法が崩壊している。こうした社会では性的虐待が蔓延し、いわゆる「盗賊」の襲撃を受け、同郷の諸民族間、出身国の異なる

難民同士、難民と地元民との衝突などの暴力が日常化している。

報告書によると、難民の安全確保の主たる責任者である政府当局は、この問題に本気で取り組めなかったか、取り組むたくなかったかのどちらかだった。UNHCRなどの人道機関は事態の改善のために、資金不足や、解決不可能なほど深く根を張る問題などの制約と闘い続けなければならなかった。

クリスプによる報告が取り上げたのはケニアのキャンプだけだが、現地職員の話では、この報告書で語られるさまざまな状況は、明確な記録はないものの、程度の差こそあれ世界中の多くの難民の現状に当てはまる。

またこの報告書は、本号の他の記事で引き出されている結論を明白にしている。すなわち、難民の安全が脅かされる危険が蔓延すると、援助職員は援助という本来の職務を効率良く遂行できない(ダダブとカクマの職員は日暮れから夜明けまで自分の居住区域から外へ出られなかった)。そして治安がさらに悪化するという悪循環に陥る。

報告書で概説されている、「日常的」に起きる暴力がメディアで報道されることは稀だが、UNHCRのある治安担当職員はある時期、ダダブは「たぶんコソボの状況よりひどかった」と語った。

あるレイプ・カウンセラーは1993年に着任後7カ月の間に起きた192件の性的暴行を記録している(2000年には80件の性的暴力が報告されている)。大半のソマリア難民の間では相変わらず女性の性器切除が広く行われ、家庭内暴力は「当たり前のことのように受け入れられてきた」。

1999年1月、ディンカ族とディディンガ族の男たちが、投げ槍と剣で戦いを繰り広げた結果、カクマで6人のスーダン難民が殺され、約300人が負傷し、400件の家が焼き払われ、多くの住民が避難した。UNHCRのフィー

ルド職員が、「ディンカ族のコミュニティーから戦いの太鼓が聞こえ、槍や弓矢を手にした若者達の姿が見えた」と報告している。

他国の人間への反感や、頭がおかしくなりそうなほど退屈なキャンプ生活が些細なもめ事をあおり、死者を出すような事件になってしまう。自転車にふたり乗りしたソマリア人がスーダン人少年グループの容器をいくつか倒したことがきっかけで乱闘になり、ひとりが殺され24人が負傷した。

問題への取り組み

UNHCRなどの人道援助計画は、保護、援助、キャンプの運営、教育、社会事業といった重要な分野を組み合わせ、この問題に取り組んだ。UNHCRは資金、物資、技術面の支援によって、キャンプ内外の地元警備部隊の効率を高めた。

法と秩序を重要視したコミュニティーの自主管理体制が導入された。特に被害者になりやすい女性と少女の安全



ダダブキャンプ内の病院

を強化するため、ダダブでは150キロメートル以上にわたって進入を阻むような、いばらの生垣が植えられた。CNNの創業者テッド・ターナー氏の寄付により、性的暴力に対する難民の意識を高める計画が開始された。地元社会はこの問題に対し敏感になり、若者の犯罪を防止する対策も始められた。

この一連のプロジェクトは効果を上げた。しかし現地では現地職員の手に負えない問題、つまり教育などの計画用資金の恒常的な不足(最近米国がキャンプの安全強化のために約66万ドルをUNHCRに寄付した)、難民を取り巻く物理的状況や各国の難民政策といった、安全問題をめぐるジレンマの根本にある問題のため、計画がうまくいかないことが多かった。

こうした対策が時折、予期せぬ影響をもたらすことさえあった。クリスプの報告書は、多くの女性が新たな責任を担い意思決定の過程に積極的に参加するように奨励された、と述べる一方で、ひとりの元難民の言葉を引用して「長老や、ソマリアで権威をもっていた人達のほとんどが力を失ってしまった。長老らの指導力に対する信頼は失われ、人々は懐疑の目を向けている」とも述べている。報告書は「この言葉が示すように、男性、女性それぞれの役割が大きく変化した。これがキャンプで横行している家庭内暴力と性的

暴力の原因を説明するひとつの要因かもしれない」と付け加えている。

報告書は、この二カ所のキャンプは、「傷つき」「攻撃的で」「強いストレスに曝され」「情緒と行動の問題」に苦しむ人々が苛

酷な環境で生活を送る「重い機能不全を起こしている場所」であり、この状況は世界中で当てはまると述べている。だが、落胆させられるような状態ではあるものの、戦禍を逃れた20万以上の人々が隣国で庇護を与えられ、混乱の続く故郷への帰還を強いられていないのもまた事実である。



各国の軍隊あるいは国連平和維持軍はその役割について賛否両論がある中で、多くの人道活動を支援している。サラエボでは内戦中、国連軍兵士と協力して難民援助を行った。

賊集団によって起こされている。そして、一般人が意図的に狙われている」

「紛争にかかわる集団は、援助機関が紛争犠牲者の世話をするだろうと当てにするようになった」と報告は付け加えた。「同時にこうした集団は、次第に人道活動に携わる職員を威圧したり、暴力を加えるようになった。政治的、法的、そして安全上の空白によって、人道援助職員への危険が明らかに増している」

「人道機関は事態の悪化に対し態勢が整っていない場合が多かった。そして今、適切な対応を定義すべく苦悩している」と報告書は述べ、さらにUNHCR自体が、安全対策のための資金調達に苦労してきたこと、管理体制、手続きや組織の文化に職員の安全問題を組み入れてこなかったことを付け加え

た。報告書は以下の主要な取り組み3段階を勧告した。これらはすぐに承認された。

- 安全対策を、今後すべての事業運営の中心に置く。
- 安全性への配慮を、あらゆる事業運営のすべての局面、すなわち立案、予算、実行、再検討そして監視に含む。
- UNHCRはあらゆる安全問題に関して、事件に反応するのではなく、事前に準備する手法を取る。

実践的な方法

具体的には、安全問題専用の資金を増加、既存の安全計画の強化や再配置、無線通信、医療、職員の厚生福利の強化、他の国連機関との連携を深めるといったことが含まれる。

アムナテギは、現場での困難な任務に備える職員訓練を改善するために、今後特別な配慮をすると述べた。「これは非常に重要です。理想を言えば、職員一般、特に責任者が安全問題の十分な基礎訓練なしに、現場へ行くべきではないのです」

いくつかの奨励策は、紛争地域での活動にはるかに長い歴史を持つ赤十字の安全手順に忠実に沿っている。たとえば安全の計画は別部門として扱われるのではなく、いつも全体の活動計画の中に組み込まれている。

赤十字では、緊急事態下で活動する派遣団の代表者が職員の安全確保に責任を持つ。UNHCRの新しい指針では、赤十字の代表者に相当するUNHCR現地代表が安全規則を作り、安全問題全般、そして全職員が示された指針に従



道を渡ろうとする市民が狙撃されないようフランスの国連軍兵士が付き添っていた。ザイル（現コンゴ）では、UNHCR職員がエチオピアの

っているかどうかを監督することになる。

重要な点は、すべての紛争地で、あらゆる当事者グループにUNHCRの任務を説明し、UNHCR職員が現地で活動する承認を取りつけることを重要視していくことだ。当たり前と思わ

れるかもしれないが、先の報告のように、UNHCRの存在の意味が、非常に曖昧になる状況が増えてきた。

明確な任務目的と全てのグループによる受諾が、赤十字活動の重要な条件となる。「あらゆるグループが我々の存在を受け入れねばなりません」と、

赤十字の安全担当者レネ・ウォルターが言う。「疑問があればすぐ話し合いを始めます。我々は、許容できるレ

ベルを越えて、危険を犯すような権限を自分に与えることはしません。紛争当事者の側に疑念が少しでもあれば、すぐにそれを晴らすようにします」

職員の安全対策の強化に関する多くの奨励策が、UNHCR職員が西ティモールとギニアで殺害された事件に関する内部調査の中で強調された。ふたつの事件の報告書は、当時なされた意志決定、その時点での理由づけ、何がどのようにうまくいかなかったのか、危

険を抑制するために将来何ができるのか、そして殺害までの経緯を詳しく述べている。

これらの報告書は、UNHCRがその任務を完全に達成しようとする限り、職員は、極めて不安定で複雑な状況下で安全が脅かされる可能性が高いまま活動することになる、としている。調査団は、西ティモールでは事態が当初の予想よりはるかに複雑で、全体として、「悲劇が起きた理由は、調査団が予想していたような単純なものではなく、基本的な失敗の結果でもなかった」と述べた。

それぞれの事件の報告書は、人道活動職員が直面する非常に異なる種類の、安全問題を示している。西ティモールではUNHCR事務所が意図的に狙われ、ただひとつの目的、すなわち物

政治的、法的、そして安全上の空白によって、人道援助職員への危険が明らかに増している

あらゆる思いが頭の中で交錯した。 生き残ることができるだろうか？

パノス・モームツイス

国境近くにある町ゴマに向けてルワンダ側から迫撃弾と銃弾が飛んできた。これが苦難の前触れだった。ゴマ地区の巨大なキャンプで暮らす何十万もの難民はたちまちパニックに陥った。それが何のために彼らを狙ったのか？

UNHCRの事務所に車で戻る時には、町中が恐怖に包まれていた。店はシャッターを閉め、子ども達は家に逃げ帰り、政府軍兵士を満載したトラックが通りを駆け抜けた。

30程の機関に所属する駐在援助職員約100人のほとんどが、ゴマの町外れにある家に集まった。UNHCR事務所の地下室にとどまったのは8人だった。この部屋がわれわれの中核部、そして唯一通じる衛星電話で外界と接触できる場所となった

最初の夜、庇護希望者に関する重要ファイルを破棄した。情報がの悪者の手に渡り人々の生命が危険にさらされるのを恐れたからだ。

翌朝ジュネーブのUNHCR本部が援助職員全員の退避を決定した。1994年、100万人以上がザイル（当時）東部に逃れた時、私はゴマにいた。2年後、彼らは続く内戦下で、何の保護も得られず、再び捨て駒のように扱われようとしていた。

我々は翌日、「人間の盾」として使われることを恐れ、反乱軍の攻撃さらされながら撤退する政府軍に合流しないことにした。

しかし、数時間もしないうちに兵士たちが事務所に押し入り、構内に止めてあった車20台のうち何台かのキーを要求した。ひとりの兵士が天井に向け発砲した。町中に銃声が鳴り響いていた。

兵士らは4台の車を略奪したが、我々の目の前で1台が砲弾を受け4人が死んだ。

攻撃を受けて

午後になって、迫撃弾1発が数メー

トル先の地面に撃ちこまれ、事務所の建物が震えた。両陣営から狙われているのは明らかだった。我々が標的にされやすいのはわかっていた。政府軍は我々を殺して、それをツチ族反乱軍のせいにはできた。

ゴマの町から逃げようとした多くの市民が殺された。難民との連絡は完全に遮断されてしまった。

ほんの数カ月前、私はすばらしい結婚をしハネムーンを終え、妻は妊娠2カ月だった。国際的大問題になったこの事態について私が生中継のインタビューに応じている時に落ち着きを示し、妻を安心させるにはどうしたらよいのだろうか。

ありとあらゆる思いが頭の中で交錯した。生き残ることができるだろうか。妻に手紙を書くべきか。生まれてくる子供にも書いたほうがいいだろうか。両親はどうしよう。同僚たちも手紙を書いていた。

その夜、事務所に銃撃音が近づいて



国連軍が民間の援助職員らを護衛することもある。しかし多くの民間団体は、護衛が活動の中立性を損ない、戦闘当事者の攻撃目標となる危険を高めると考えている。

理的破壊、人間の破壊のために、圧倒的な力によって攻撃された。

ギニア・マセンタでのクボノンの死は、偶発的悲劇に近いものだった。彼の家がたまたま、町の軍事拠点を攻撃した反乱軍の退却路上にあったのだ。反乱軍が逃走用に使おうとした彼の公用車が動かなかったので射殺された。

どちらの場合も UNHCR職員は、近くにいた警察や政府軍から十分な情報、警告、そして保護も与えられていなかった。この事実は、将来の安全計画において人道機関は、今まで頼ってきた「公的保護」の弱体化を自ら埋め合わせなければならないことを物語っている。



UNHCR / P. MOUTZIS

1994年、数日のうちに何十万という恐怖に駆られたフツ族がザイル（現コンゴ）の町ゴマになだれ込み、武器やナタを捨てた。2年後ゴマは戦闘に巻き込まれ、援助職員らはかろうじて脱出した。

来た。少しして事務所で足音がした。すぐに見つけて殺されるかもしれないと安全担当顧問が言った。私は衛星電話の受話器をはずした。電話のベルが鳴って隠れ場所がわかってしまおうといけなかったからだ。結局、侵入者は出ていった。

2日目に、自分達を守ってくれていた数人の兵士が建物の前で殺された。「隠れ家」にいた援助職員が言った。

期待はずれもあった。キンシャサのフランス大使館からと思われる電話が

あり、近くにいるフランス外人部隊が救援行動を起こしてくれるのかと思った。しかし何も起こらなかった。

その後ジュネーブ本部が、キャプテン・ジョンという人物が我々と連絡を取り、たった3キロ程先のルワンダ国境まで護衛してくれると知らせてきた。居場所を知らせるために白旗を戸口の外に立てたが、だれも来なかった。

4日目の夜が過ぎ、賭けに出る決心をした。まず隠れ家まで車で行き、それから一気に国境に向けて走るのだ。ゴマにはまだ反乱軍がいたが、我々は2台の車を使い、燃えているタイヤ、市民や兵士の死体で埋まった人影のない通りを走り抜けた。地雷を踏む危険もあった。

無事ルワンダとの国境に着いた。奇跡的に命拾いしたと思った。4年後、カルロス・カセレスが殺される直前に書いた電子メールを見た。今日私が生きているのは、ひとえに幸運だったにほかならないことを思い知らされた。

モームツイスは隣国ルワンダで大量虐殺が起きた後の1994年と1996年にザイル（当時）東部でUNHCRの広報官を務めていた。

小さな一歩

現行の提案はたとえ承認されても、援助職員や難民にとってより良い環境を作っていくための小さな第一歩にすぎないだろう。

さらに多くの複雑な問題にも、取り組まなければならない。

援助職員と同様、難民の安全も最近急激に悪化した。

1994年ルワンダの大量殺りくのように、あらゆる集団があらゆる場所で殺害の標的となる。明らかに安全と見られていた隣国に着いた後でさえ、難

民らはしばしば軍隊の、あるいは政治的、性的嫌がらせの標的となる。

庇護の手続きはヨーロッパや世界の他地域で厳しくなり、数十億ドル規模

の下劣で危険な人身売買や密入国の仲介ビジネスの発生を助長している。

家を追われ国内避難民となった人の数は2000

万人から2500万人と推定されている。「国外」に避難した難民ではなく「国内」に留まらざるを得なかったため、難民より国際社会の注目度が低く法的

保護も受けにくかった。国際社会は最近やっと、こうした人々をどのように、より効率的に援助できるかと考え始めた。

緊急事態が危険な状態となった場合の、国連や他機関の現地職員の処遇が大きな問題となっている。彼らはたいいてい、事業にかかわる職員の大多数を占め、最も危険な仕事を引き受ける。外国人職員は最終的には困難な状況から脱出できるが、現地人職員は国連の規則、あるいはその国の法律のために避難できないか、家族がその地域にいるため脱出を断る。こうした職員の何人かが命を落としてきたが、この問題が取り上げられることはなかった。こ

「我々は安全性を高めようとしてきた。いくらかの進歩があった」



援助職員と難民、双方にとっての危険が増大する中、多くの難民のために食糧供給と保護活動が続く

うした犠牲者の家族の救済法はまだ正式な形で解決されていない。時折受け取ることのできる唯一の補償金は、運のよかった同僚からの寄付だった。

大規模な事業では国連と何百という非政府機関が肩を並べて働く。そして現場において臨時体制で協力することもよくある。しかし、こうした協力の合意を正式なものにし強化する試みは失敗した。例えば、どのNGO本部も、1996・1997年の国連との合意覚え書きにまだ署名していない。覚え書きに大きな欠点があるとされているためだ。

2000年後半にジュネーブで行われた安全問題に関する会議は「安全面での協力は人道活動にとって役立つのは当然だと考えられている」と指摘すると同時に以下のようにも付け加えてい

現行の提案は、
支援職員や難民にとって
より良い環境を
作っていくための
小さな第一歩にすぎない。

る。「NGOが仕事の遂行のため、あるいは安全のために、公平なイメージを重視しなければならない時、国連や国連の調整機構から距離を置かざるをえない時もある」

中立性

人道社会で最も意見が分かれる問題のひとつが、この「中立性」であり、民間の援助職員が軍隊とどれくらい密接に協力して働くべきか、というもの

だ。多くのNGOが、物資援助の面でどれだけ有益であっても、この種の協力は組織の中立性と人道的使命を致命的に傷つけると主張する。

多くの反乱軍兵士が今までの行動規範に従わなくなった今、自分の誠意を立証するのは援助職員次第になっている。自分の肩書きが身を守ってくれるだろうと思ひこむことはできない。

UNHCRは、ボスニアなどで国連平和維持部隊と、アフリカ中央部では友好国の部隊と共に働いた。軍隊は多人数への供給活動を、文民組織が持たないその後方支援能力によって支えてくれた。

この考え方と手法の違いは、99年コソボで、UNHCRが紛争へ直接かかわっていたNATO軍と協力したことを、多くのNGOが批判した時に最も顕著

「彼らは蚊を殺すように、簡単に人を殺す」

カルロス・カセレス（33歳）は2000年3月、インドネシア・西ティモールに難民保護官として着任した。コーネル大学法科大学院卒の彼の前任地はUNHCRモスクワ事務所だが、新しい着任地アタンブアは人道活動最先端の町だった。アメリカ人のカセレスは、難民支援の最前線での仕事に意欲を感じていたが、現地の危険に対して次第に不安もつらせていた。彼が友人に送った次のEメールを打っていた時にも、反感を持つ武装民兵のデモが今にも起きるといいうわさがあった。

次の任地は、熱病と凶暴な兵士がない熱帯の島と願っていた。今この瞬間、僕たちは事務所に立てこもっている。昨夜、民兵のリーダーが殺された。

トラックやバスで民兵が押し寄せてくるといふニュースが広がった途端、アタンブアは閉鎖された。街中から人影が消え、店という店はたちまち板張りにされて閉店された。2週間ほど前に有刺鉄線をたくさん買っておいてよかった。

もうすぐアタンブアで暴力行為が起きるといふニュースが入ってきた時、僕は事務所にいた。スタッフのほとんどを家に帰した。事務所に残った僕たちの無事を祈っていると無線でだれかが言っている。民兵達がここへ向かっている。この事務所をたたきつづもりだ。彼らは何も考えずに行動するし、蚊を殺すように簡単に人を殺す。

君がこの事務所を見ることができたらと思う。窓はベニヤ板でふさがれて

いる。スタッフが、さっき急いで吊るしたばかりのカーテンの隙間から外を覗いている。僕たちは敵を待っている。武器もなく、ただ座って、攻撃の波に襲われるのを、えじきになるのを待っている。3週間この島を離れるのが楽しみだ。明日出発できるといいんだが。民兵たちの動きを待っている間、明日のクパンでの会議の議題をまとめておこう。会議の目的は、ここの活動を今後どう進めていくかの話し合いだ。

カルロス

地球の反対側にいる友人がこのEメールを読んでいる時に、カルロス・カセレスとUNHCRの同僚2人は事務所内で惨殺され、死体は焼かれた。

になった。文民の援助職員は武装すべきでないという合意はあるが、やはり護衛が必要なのだろうか、それはどんな時だろうか。赤十字は92年に無政府状態のソマリアで武装した保護部隊が必要なことを、不本意ながらも認めた。

1999年にブルンジで国連職員2人がフツ族過激派に殺害された時、武器を持った職員が同行していなければ、もっと死者が出ていたかも知れないと言った職員がいた。だが、この記事の冒頭にもあるフランソワ・ブレジオーシが巻き込まれた事件では、銃を持ったコンゴ人とツチ族難民が、2人の一般人が銃を持っているのを見つけ、より激しい攻撃を加えた。

今日、人道活動において安全上、危険で矛盾する事実がある。援助職員が最も危険にさらされる時、難民が最も援助を必要とするのだ。1999年、東ティモールでは、首都ディリから脱出するようにという本部命令に、そんなこ



2000年9月のUNHCRの現場職員が惨殺された事件の直後、職員たちがジュネーブで抗議デモを行った。安全保障理事会に職員の安全確保問題を取り上げるよう訴える請願書に、世界中から何千人もの署名が集まった。

とをすれば事務所の敷地内に避難している人々が大勢殺されると援助職員らが強く主張し、意見を認めさせた。彼らが多くの人々の命を救ったのは間違いがない。

しかし、1年後の西ティモールの事件では、危険な状況下での正しい判断と究極の代償を支払うことが、紙一重であることが示された。

「遺書を書く時間はおるか、

大きな国際機関であれ、小規模な民間組織であれ、人道援助職員にとって安全問題は毎日の悩みの種になっている。事件のうち極めてひどいものや、注目を集める虐殺や誘拐は外の世界に伝えられるものの、



UNHCR / M. KOBAYASHI

スリランカ 国内避難民を援助するため、援助職員たちは政府軍とタミル人ゲリラとの間の危険な中間地帯をしばしば横断しなければならない。

◆ スリランカ(1997年) ◆

すごく暑い。重いプレートが前後に付いた防弾服を着ていると、白いヘルメットから玉のような汗が背中へと流れる。

摂氏45度か50度か知るすべもないが、とにかく、気にする者も、あえて深呼吸する者もない。

漆黒の間。途中で廃屋になった農場、様々な色の細長い布や割れたココナッツが供えられたヒンズー教の祭壇がある。そこでトラックの運転手らが中間地帯を渡る日にお祈りをする。

パームやしの木々のてっぺんは砲撃で吹

き飛ばされ無くなっている。

運転手のダニーは押し黙ってハンドルの後ろに隠れるようにして、這うように、数センチ単位でゆっくりと車を進める。後続の空荷のトラックも同じペースで進む。いつ爆発するかとだけ考えながら。爆発が起きればその瞬間、我々は吹き飛ばされ、生きて故郷に帰れない。つまり地雷にやられたということになる。

遺書を書く時間はおるか泣き叫ぶ時間すらない。慎重に前進していく。もうあと500メートル、400、300、200、100。やった、着いた！ 全身が汗でぬれている。

もうヘトヘトだ。

反乱軍の検問所で、大きな銃を持った小柄な黒装束の戦闘員に迎えられた。

ダニー、腹がへった。トラック運転手たちが集まるボロ屋で最高に辛いカレーとココナッツミルクを食べ、塩分と水分を補給してアドレナリンのレベルを下げよう。我々の足はまだ動かない。

私は前線を通して反乱軍の支配下地域から引き返すという決断をした。友人の准将が、反乱軍地域から引き返す際は、夜間でも私を陣地内に入れ、陣地の柵を開けると

泣き叫ぶ時間すらない」

「ありふれた」問題 暴行、死の脅迫、強盗、紛争地域の横断、
異常な事件への対処などはまず知られることがない。

約束した。

私はダニーと運転手5人、助手5人と自分自身の命に対し責任を負っていた。

軍は柵を開けなかった。我々は中間地帯を通して引き返さねばならなかった。

我々は地雷に吹き飛ばされなかった。銃撃も受けなかった。

地球上で一番辛いカレーだった。

キリアン・クラインシュミット

◆ コソボ(1999年) ◆

コソボのプリシュティナ、ポドウエ間の幹線道路だった。我々の右手には、重装備のセルビア軍、戦車、兵員輸送車。左の丘からは銃撃音が散発的に聞こえる。

何の警告も無く、セルビア軍は彼らが持つあらゆる武器で幹線道路の車両を挟んで攻撃を始めた。我々の車両のすぐ上を、20ミリ砲の砲弾がうなりをあげて飛

ぶのが聞こえる。

銃撃戦がおさまるまで1時間、近くのレンガ造りの車庫に避難した。プリシュティナへ戻ると、コソボ解放軍がセルビア軍への応戦を開始していた。防弾服に身を包み援護されていたコソボ検証団の一行に出遭った。

近くの村にプリシュティナで透析を受けないと死んでしまうアルバニア人がいる。「手伝ってくれるか」と、メンバーのひとりが言う。

Uターンして再び危険地帯を走り抜け、患者とその息子を乗せた。プリシュティナの病院で息子が「待っていて連れて帰ってくれないか」と頼んだ。同僚が汚い言葉で応じた。私は「毎日こんなことをしてるのか」と同僚に聞いた。彼はにやりと笑っただけだった。

ブライアン・ゴルスウォージー

◆ マリ ◆

マリ北部、トゥアレグ族の帰還民指導者と面会后、ランドクルーザーに戻ろうとした時、ターバンを巻き覆面をした男二人が、カラシニコフを振りかざして廃屋から突然現われた。

銃が撃たれたが、恐怖を感じたり、逃げようとする間もなく、男達は車に乗り込み



マリ 市場に行く帰還民

走り去った。車が見えなくなって初めて、運転手が撃たれているのに気がついた。命は助かったが、彼の搬送は長く苦しいものだった。

幸い、車と無線を持った赤十字の派遣団を見つけた。しかし周波数が異なり、最寄りのUNHCR事務所に連絡がとれず、やっと1,600キロ離れた首都にある事務所を経由し警察に緊急事態を連絡した。

難民と帰還民にとって、この事件の直接的な影響は小さかった。しかし彼らは国際的組織の引き上げにつながらないかと心配した。

我々は安全対策を再検討し、現場での任務には武装憲兵の護衛をつけることにした。難民に憲兵を受け入れてもらうのにはずいぶん手間どった。政府軍との武力闘争が、難民達の記憶にまだ鮮明に残っていたからだ。

キャロライン・ワンド



コソボ 1999年のNATO空爆以前でさえコソボでの生活は非常に危険だった。UNHCRの現地チームは、一般市民の状況を定期的に視察し支援を行った。



© S. SALGADO

トルコ 1997年、イラクに近いトルコ山岳地帯にいるクルド難民

◆ トルコ(1991年) ◆

トルコの町で庇護申請希望者や難民との面接を行っていた。部屋には暖房がなく、私はコートを着ていた。男の庇護申請はすでに却下されていたが、彼はその不運、問題や欲求不満すべてを私にぶつけていた。人生で遭遇した不幸は、すべて彼の前にいる職員、つまり私のせいということだ。

突然、男が部屋を出て行き、私は危険な目にあいそうな予感がした。小型パソコンを閉じ、何気なくコートのボタンを外した。男はガソリンがいっぱい入ったビンを持って部屋に駆け戻ってきた。自分と私にガソリンを振りかけ、火をつけた。彼は私を道連れに焼身自殺しよう、死のダンスさながらに私に抱きついた。私はコートからすり抜け難を逃れたが、彼の手に残ったコートと彼の片脚が燃えていた。

数日後、彼は病院から私に手紙をよこした。「キンテロ様、私はあなたを殺したいと思いましたが、どうぞ、また私を

◆ ◆ ◆
助けてください」

ロベルト・キンテロ・マリーニョ

◆ ルワンダ・キガリ(1997年) ◆

自宅の敷地内へ車を乗り入ると、軍服姿で銃剣を装着したAK47ライフルを持った男が二人いるのに気がついた。自宅の警備員らしき者と一緒だったが、彼らは私から車のキー、無線機、サイフを取り上げた。敷地の隅に押し込まれ、太腿が銃剣で突かれたのを感じた。目隠しをされ、ロープで両手を後手に縛られ、うつぶせに地面に放り出された。撃たれると思った。

じきに彼らは私の車に乗って走り去った。両手が縛られたまま家まで歩き、台所のナイフでロープを切ろうとした。両肩の痛みは耐えがたかった。浴室へ行き、鏡を見ながらもう一度ロープを切ろうと試みた。「本物の」自宅の警備員は私より先に襲われて、同じように縛られていた。結局、巡回する警備隊が助けてくれた。その翌日、仕事に戻った。

彼は私を道連れに
焼身自殺しようと、
死のダンスさながらに
私に抱きついた。

後日談 私は、400ドルほどかけて敷地を囲む塀に有刺鉄線を設置するよう勧告された。窓に格子を取付けた場合の費用は払い戻されるが、家に刺鉄線を張った場合は払い戻しの対象外だ、と後になって教えられた。

エイブラハム・エイブラハム

◆ コンゴ(2000年) ◆

反乱軍ゲリラの地域司令官と名乗る、男は「一切の攻撃を午前6時30分まで控える」と言う。「明日、作戦を開始するよう命令されている」

我々は「午前7時まで銃撃を控えてくれ」と頼んだ。彼は同意した。

我々はエンジン付きカヌー、医師、青いビニールシート、必死な思いの難民5,000人には十分でない

物資を、この人口400人の小さな村へ運んできた。熱帯雨林の中の幹線輸送路である大きな川沿いにあり、平和な隣国へ川を渡って逃れると決めた多くの人々の避難所だ。

反乱軍の男は12時間の猶予をくれた。その男を探す政府軍兵士が大勢いるわずか500メートルしか離れていない島の横を通り、日没時にここに着いた。我々には他国の武装護衛隊が付いていたが、彼らは恐れをなしていた。

この場所には長居をせず、戻って来てもないと分かっていた。我々UNHCR職員やNGOのメンバーは、徹夜で仕事をした。ほとんどが下痢症状の患者約600人を治療し、4,000人にビニールシートを、そして全員に少なくとも何がしかの道具、せっけん、または容器を配った。

ランタンの燃料が切れた時、配布を止めた。まずいコーヒーを一杯飲み、急いでカヌーに荷物を積み込み出発した。

見張り番よ、カヌーは浅瀬で速度を落とさねばならないが、どうか通過させてくれ。

たった6週間前、武装した護衛が付き、さらに国連旗を掲げていたにもかかわらず、この場所で我々の同僚と友人が捕らえ



ザイール（現コンゴ） アフリカ中央部の熱帯雨林にいた難民はどうしても援助が必要だった

られた。一行7人は、殴られ、殺すと脅迫され、傭兵がスパイのような扱いを受けた。

同僚らの苦難は2週間続いた。

魚や鳥や獲物であふれる川と熱帯雨林の美しい楽園に囲まれながら、このカヌーに乗っているのが突然いやになったのはこの時だった。学者か研究者か教師だったらよかったのと思った。

キリアン・クラインシュミット

◆ ザイール(1997年) ◆

何万人ものルワンダ難民が森に隠れ、そして、女性や子供を含む難民たちが虐殺されているという証拠が集まり始めた。

その夜、戒厳令の最中に、私は地方司令官の事務所に呼ばれた。武器で身を固めた反乱軍兵士が何十人も待ちうけていた。放り込まれるように私は中に入った。

反乱軍「大臣」がどなった。「我々の兵士が難民を大量虐殺している旨の極秘報告書を書いたのはお前だ」

その後3時間、私と同僚達はくり返しののしられ、脅された。「我々は反乱軍だから、何でもありだ。お前や同僚が殺されたり行方不明になっても、戦闘の最中、入りこむことのできないような森にだれも捜しにきやしない」

先に書いた内容を否定する新たな報告書を書くよう命じられた。彼らは我々の現地職員およそ80人を、反乱軍側の人員と置き替えるよう要求し、事務所を閉鎖すると脅迫した。

恐ろしくなったが、ずっと考えていた。「落ちつけ、やつらは反乱軍だ。怒りを発散させればいい。その後、様子を見ることにしよう」

真夜中ごろ、司令官が我々全員を夕食に招待した。たぶんこれで命びろいだ。

リノ・ボーディン

◆ モザンビーク(1988年) ◆

撮影がほぼ終了しかけた時、モザンビークへ帰還する難民用の援助物資を積んだトラック50台の隊列を目にし、それを最後の撮影にしようと決めた。あるトラックの上から撮影していたが、レンズ越しに、一人の軍人が私に身振りて何か合図しているのが見えた。

必要な公的許可証を見せたが、この軍人は明らかに酔っ払っていた。

我々は、竹製の檻に投げ込まれ7時間監禁された。近くで戦闘が起きているのが聞こえた。我々しかおらず、孤立状態で無力だった。看守と話そうとしたが無駄だった。

隣国マラウイ駐在のモザンビーク大使も逮捕されていたが、じきに大使は釈放された。大使が我々の状態をジュネーブ本部に何とか連絡してくれ、我々は7時間後、夜中に行くあてもないまま釈放された。

その夜私が学んだのは、れっきとした身分証明書があっても、一寸先には悲劇

が待ちうけ、残酷な独裁者にもてあそばされる可能性がある、という教訓だった。

ジャン・ベルナル・モラード

◆ グアテマラ(1995年-1998年) ◆

安全に関する矛盾のひとつは、特定の状況下では、紛争後の活動は戦争中より危険だということだ。1990年代のグアテマラでの場合がそうだった。実際に紛争が続いている中、大勢が帰還し、帰還者たちは大きな危険を冒した。しかし、グアテマラ軍や反乱軍はUNHCRに配慮していた。

平和になり武装解除が実施されると、今まで比較的安全に通行できていた山やジャングルの同じ道が、UNHCRなど眼中にない武装兵らに頻りに襲撃される場と化した。我々のチームはあまりに無防備だった。現地の人々が我々の自動車の正面についている物体(実はアンテナ)は大型の武器だというわさが広まっても、我々は否定しなかった。襲撃を抑止できるかもしれなかったからだ。

ロベルト・ミニョーネ

◆ ソマリア・モガディシュ(1993年) ◆

モハメッド、速度を上げて、速く、もっと速く、ここを通過してくれ。シェイクとアリは武器を携帯している。シェイクは前の座席にいる。アリは後部ドアを開け、いつでも銃を撃てる態勢だ。

悪党らは、今日はどこにいるのだろう。この道の先が怪しいな。

あそこに立っている男達はだれだ。

今日は、だれに用なんだ。

「アメリカ人でなければ、大丈夫だ」と私は言われた。「最近、走っている車の中から撃たれることがたまにあるぐらいだ。大したことはない」。数日前、ケイという若い金髪のアメリカ人はそんな銃撃の中で殺されたのではないが。

我々は竹製の檻に投げ込まれ7時間監禁された。

近くで戦闘が起きているのが聞こえた。

防護服には、なぜ側部に保護が付いていないのだろう。私のヘルメット小さすぎる。どうして私の頭全体を覆っていないのだろう。

国連の敷地にあるパキスタン軍検問



ティモール 市民が西ティモールから東ティモールの我が家に戻る

所。モハメッドはまた無事到着した。

「国連の方ですか。IDを拝見します」と、パキスタン人の警備兵が土のうの後から言う。

バン、バン、バン。弾丸が検問所近くの壁に当たった。

何てことだ。早く通してくれ。

「IDを提示してください」と警備兵は譲らない。

公的証明らしきものを振りかざして、ようやく入ることを許可された。

5分後に会議だ。担当職員が私に、また遅刻ですよと言った。

◆ インドネシア・西ティモール (1999年) ◆

夜明けと共に、西ティモールから東ティモールの故郷へ帰るのを心待ちにしている

300人の難民を乗せる作業を始めたが、難民キャンプには、ひとりとして帰還させまいとする民兵グループが群がっていた。

警備の不手際と小規模な暴動で、我々の善意は台無しになった。バスとトラックの

隊列がキャンプ入り口に到着したとき、警察の護衛隊はいなかった。

銃を持った民兵達がいきなり我々4人を取り囲んだ。大声でわめき、乱暴に押しやり、この場から立ち去れと命じた。民兵のリーダーが突然、私の首につかみかかった。私は彼を払いのけ、無線機で助けを求めた。

その男はまた、私の首につかみかかってきた。彼の目には見たこともないような激しい怒りがあった。私はそこに、ひとり凍り付いたように立ちつくした。同僚達は当然ながら、危険なので逃げ出していた。

その瞬間に警察が到着した。警察の指揮官は民兵のリーダーに仲間内のようにたしなめ、我々にこの帰還作戦を続けるならば、身の安全を保障できないと警告した。間髪なかった。しかし、どのくらい危機が迫っていたのか、ずっと後になるまでわからなかった。九死に一生を得た事件だと思い知らされたのは、そのほぼ一年後、同僚達がやはり西ティモールで殺された時だった。

トム・バルガス

何かを変えることができる...

最前線の国連ボランティアたち

リチャード・ナイバーク

アダム・ラジャブ・オドンゴは、タンザニア政府の病院を視察中に見た、2歳の難民の子の苦痛に満ちた表情が忘れられない。母親を殺した銃弾が、おぶわれていたこの男の子の右足も打ち砕いた。コンゴの大混乱から脱出中の市民たちに助けられ、その子はタンザニアへ逃がれたが、手当てもされず3日間病院で放置されていたのだ。

「あの時は冷静ではいられず、つらく悲しかった」と、ウガンダ人のオドンゴは言う。「難民たちがいる前で私は泣き出してしまった。泣いている男の子を、自分もすすり泣きながら運んだ。後ろから難民達がついてきた。我々は診察室に入り、どうしてこんなことが起きているのかと尋ねた。その日のうちに手術が行なわれ、子供の足は切断されたが一命は取りとめた。オドンゴによる仲裁は、タンザニアの病院での難民の入院手続きや病院への紹介に関する監視態勢の改善につながった。

オドンゴは、国連システムのボランティア派遣機構として1970年に設立された国連ボランティア計画（UNV）への参加者のひとりである。UNVは毎年、専門家らおよそ4,500人を約150カ国へ派遣し、ボランティアたちは選挙実施の支援、緊急支援物資の配付、人権や男女平等の促進、保健衛生施設の改善や環境保護など、幅広く多岐にわたる活動に参加している。

この10年で約1,500人の国連ボランティアがUNHCRによる難民の受け入れや帰還、難民キャンプの運営や輸送までに及ぶ仕事に従事してきた。

コソボでボランティアのグループと一緒に働いたUNHCR主任緊急事態担当官のジョー・ヘゲナウアーは言う。「国連ボランティアの仕事の特徴は、非常な熱心さと勤勉さだ。国連ボランティアには、我々が援助する人々

の生活環境改善につながる、新しく複雑な仕事をよく依頼する」

協力関係の強化

UNHCRとUNVは、2000年6月に緊急援助や帰還業務のためボランティア待機要員のリストを作成することに合意し、連携をさらに強めた。

現場での仕事は過酷なペースで続く。コンゴ難民約6万人が避難生活を送るルグフォ難民キャンプがあるタン



タンザニアで働くボランティアのひとり、スィルジャ・マロディチ

ザニアのキゴマ地区でオドンゴが働き始めて3年になる。

同じく国連ボランティアのスィルジャ・マロディチは、この地域内にいる約35万人の難民を援助するために各援助機関が使う軽車両約350台とチャーター機3機の管理担当者であり、キャンプの建設も手伝う。「朝3時に起きることもある。運が良ければ夜の10時ごろに終わる」と彼は言う。

国境を越えた隣国コンゴのマタンダ

という町で、UNV計画の職員ジョバンニ・レプリにも、別の2歳児との「出会い」があった。イタリア人のレプリがその子、モデステ君を見た時にはほとんど呼吸もせず飢死寸前だった。「栄養補助食のクラッカーと水を持っていたので、食べさせてみた」と彼は語った。「できるだけ早くゴマ(一番近い大きな町)へ連れて行った」。少年は助かり現在はルワンダで里親と暮らしている。3万2千人のルワンダ難民の帰還支援、ブルンジからの難民の世話や2件の道路補修事業の開始などを手がけてきたレプリにとっては、当たり前前の日常業務だった。

地球の反対側、東ティモールのパウカウでは、フランスのアンヌ・リシエーが、難民の保護や帰宅の準備を手伝い、難民と現地住民の状況を改善するための「即効プロジェクト」にかかわっている。「UNHCRの現地活動にとって国連ボランティアは不可欠です。毎日現場へ行くのは私達ですから」と彼女は言う。

UNHCRも同様の考えだ。UNHCRは国連ボランティアたちによる難民のための功績を称え、2000年のナンセン難民賞をUNVへと授与した(30ページ)。また、国連総会は2001年を国際ボランティア年と定めた。世界中でのボランティア達の働きに光を当て、さらに多くの人々が、援助を必要としている世界中の人々を支援するため、自分の能力を自発的に提供するよう奨励するためだ。

ボランティア活動は世界のどこでも可能です。詳しくは以下のホームページまで。

<http://app.netaid.org/OV>

新たな悲劇

21年にわたる戦い、そして今、干ばつによる荒廃

ユスフ・ハッサン

アフガニスタンが再び危機に陥っている。世界で最多の、そして最長にわたって難民を生み出すという不名誉な記録に加え、史上最悪とも言われる干ばつに見まわられている。その結果、死者と土地の荒廃もたらされた。

影響は1200万人に及び、400万人もが深刻な被害を受けた。作物は収穫できず、畑や果樹園、河川、ダム、井戸は干上がり、何百万ものアフガン人が生活の糧とする家畜の群れが死んだ。穀物生産は半減し、230万トンにもものぼる記録的な食料不足に陥っている。

国連は「アフガニスタンにとって今年は特に困難な年だったが、2001年に人々の苦難は今年よりさらに厳しくなる」とし、何百万人もが飢餓に直面すると予想している。

何万人もの人々が故郷を去り、生き残るために必死でアフガニスタン国内、さらに国外へと移動した。主要都市であるカブール、カンダハル、ヘラート、マザリシャリフ、ジャララバードへは避難民が常に流れ込んでいた。最も被害が大きかったアフガニスタン西部地方から5万人以上が、国連が数個のキャンプを設営するヘラートの町へと逃れてきた。北部では、避難民は仮設の避難所、学校、公共の建物などで避難生活を送ったり、現地家庭に身を寄せたりした。国境を越えパキスタンとイランへ入った人々の数も相当

数になる。

21年間絶え間なく続き、終わる気配のない戦争で荒廃しきった国に、干ばつがさらに追い討ちをかけた。

1979年のソ連によるアフガニスタン侵攻が、620万人のアフガン人を隣国のイランやパキスタンへと追いやった。1989年のソ連軍撤退、1992年のナジブラ政権の崩壊が平和へのかすかな希望をもたらしたが、勝利を手にしたゲリラ勢力は、たちまち反目する派閥に分裂した。

1994年に登場したタリバンも、国の混乱を止めることはできず、流血の内戦が再開された。

タリバンは1996年に首都カブールを制圧してから、アフガニスタン北東部を支配する対立勢力、アームド・シャー・マスード率いる北部連合の打倒に勢力を傾け、以来両者は、前線だけは移動するものの、長い間決定的な勝敗をつけられないままだ。

タリバンは、2000年9月、正式な大統領とされるブルハヌディン・ラバニの政治の本拠地、タロカーンを占拠し、タジキスタン国境への幹線道路も制圧した。

さらなる脱出

干ばつによってもたらされた荒廃から逃れようとする人々に加え、7万人もが戦闘から逃れようと避難した。

凍てつく寒さの中、タジキスタンへ

の入国を拒否された約1万人が、タジキスタン国境パイヤンディ川で立ち往生した。

2000年11月、国際社会からの継続的な資金援助なしでこれ以上難民に対処できないとパキスタンが国境を封鎖する前に、6万人が同国へ逃れた。

ソ連侵攻を逃れた6百万を超えるアフガン人のうち、約440万が帰国している（UNHCR設立以来、最大規模の難民帰還のひとつ）が、パキスタンとイラン両国には約260万人のアフガン人がいる（2000年1月1日時点）。加えて数知れない人々が世界各国に散らばっており、アフガン難民は現代史上「最大」そして「最も長期にわたる」難民のグループとなっている。また、60万から80万人が国内避難民となっている。

希望的観測などあったためしはなく、将来の見通しは非常に厳しい。

難民の受け入れ国は、難民受け入れに疲れ始め、受け入れ国の国民の間には難民を嫌悪する感情が高まりつつある。庇護の機運がしばむ中、20年以上難民生活をしているアフガン人は、長居しすぎて迷惑がられていると感じ始めている。

「高官が次々と難民キャンプを訪問し、人々の悲惨な状況や苦難を軽減する必要を説いていた日があったのをよく覚えている」と、1980年代にもパキスタンで勤務していた、UNHCRパキ



アフガニスタンの干ばつと戦争の影響

スタン代表ハシム・ウトカンは回想する。「そうした光景は、今では遠くにかすんでしまった。戦略上の関心事の変化、別の場所での難民の出現、報道される機会の減少と、アフガン難民は話題にならなくなった」

見捨てられて

アフガニスタンの状況を特に悪化させているのは、かつての超大国など、この国を不安定にした国々が、突然アフガニスタンを見捨てたことである。冷戦が終結し、アフガニスタンの事態は緊急事態として注目を集めなくなり、国際社会は他の地域での注目度の高い危機に関心を移した。アフガニスタンは注目に値する戦略拠点でなくなっていた。

アフガニスタンにおけるUNHCRの事業への支援金が最低水準となり、難

民援助の大幅削減が余儀なくされた。アフガニスタン国内の状況は、戦争と干ばつで悪化の一途をたどった。

厳しい財政状況、体制の崩壊、人権侵害、関係当局の方針や施策により、アフガン難民の帰還支援事業は難航している。

最近、UNHCRが4,025人の帰還民家庭の世帯主に対して行った調査によれば、24パーセントは定職が無く、41パーセントは自宅が完全に破壊され、11パーセントは地雷や不発弾などの問題に直面し、45パーセントもの人々が保健衛生サービスを一切受けられず、79パーセントが子どもを就学させることができない状態だった。

アフガン難民とUNHCRは、「資金に制約がある中、将来の見通しの立たない帰還と庇護状況の悪化」という二重のジレンマに直面している、とUNHCR

南西アジア地域局長ムスタファ・ジェマリは、持続可能な帰還を達成するために、国際社会はアフガニスタンに再び関心をもち、破壊されたインフラを再構築のための援助をする必要がある、と言う。

政治的解決が何度か試みられたが失敗に終わった。この紛争は、国内、地域、そして世界的要因が複雑に絡みあった様相を呈し、純粋な内戦とは捉えることはできない。国連は、関係する勢力の側からこの紛争をあおり続けている外部関係者を非難している。

アフガニスタンの悲惨な状況を報道する外国からのテレビカメラや記者はいない。国際社会が無視すると決めた知らざる戦争がもたらす破壊に、アフガニスタンの人々は耐え続けている。



2000年12月14日、ジュネーブでのUNHCR設立50周年記念式典における、緒方貞子高等弁務官（当時）と後任のルドルフス・ルベルス・オランダ前首相（左）

UNHCR / S. HOPFER

時点)を援助する世界的な人道機関の長として3年の任期を任された。同氏を指名したコフィ・アナン国連事務総長は「(ルベルス氏は)オランダ首相、学者、大学教授、また、様々な民間や非政府組織に積極的に関わった人物として、素晴らしい実績の持ち主だ」と述べた。最近まで世界自然保護基金(WWF)の総裁だったルベルス氏は指名に「少し驚いたが、光栄に思う」と述べた。ルベルス氏は1939年5月7日ロッテルダム生まれ。ナイメーヘンのカニシウス大学とオランダ経済大学で学んだ。家業の事業経営に携わった後、1973年に経済大臣として入閣し政治家としての長いキャリアを始める。1982年から1994年まで、戦後最も長期にわたって首相を務めた。政界から退いた後はオランダとアメリカの大学でグローバル化や持続可能な開発を教えた。ルベルス氏は「困難な立場にある人々のために私の独創性を発揮したい。それが役立つことを願っている」と語った。

新高等弁務官

オランダ前首相、ルドルフス・ルベルス氏が新国連難民高等弁務官として、2001年1月1日就任した。長く政治家だったルベルス氏は、1991年から高等弁務官を務めた外交官で学者でも

ある緒方貞子氏の後任として、活動開始50周年を迎えたUNHCRの第9代高等弁務官として着任した。ルベルス高等弁務官は、職員5千人が世界120カ国以上で約2230万人(2000年1月1日

ナンセン難民賞

難民援助に対する功績を称え、国連の専門機関、そしてアフリカ、アジア、ヨーロッパ、ラテンアメリカからの難民4人に、2000年度のナンセン難民賞が授与された。1955年にUNHCRが始めたナンセン難民賞の授与は、通常は毎年一人または一団体に限られるが、昨年末に退任した緒方貞子・前高等弁務官によれば、創立50周年を記念し、国連ボランティア計画と「亡命生活や迫害を受けたつらい経験を糧に他の人々を援助した4大陸の4名」が表彰されることになった。

国連ボランティア計画は、全世界で様々な実地活動を行う約4,500人の専門家を擁する組織である。「過酷な地域で困難や危険に立ち向かっている人々こそ認められるべきだ。我々の職員で優秀な者の中にも、国連ボランティア出身者がいる」と緒方氏は語った。

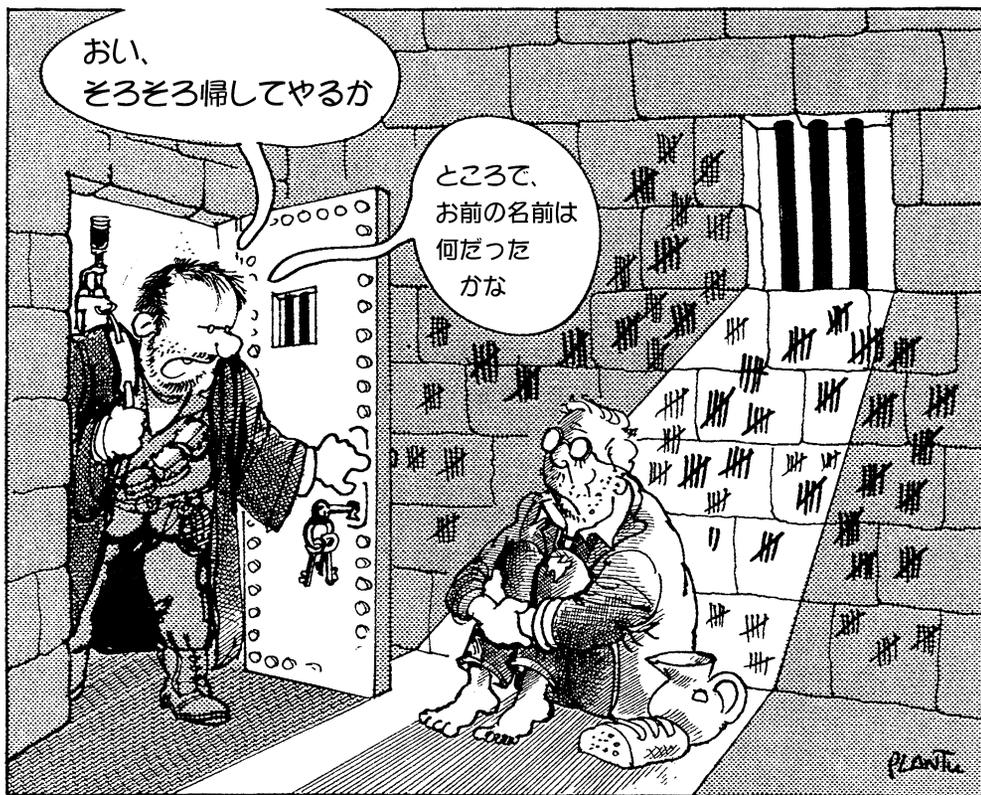
受賞者は以下のとおり。

エチオピア正教会アブネ・パウロス総主教。アメリカへの元亡命者、エチオピア、エリトリア間の調停に貢献。

ラオ・モン・ヘイ博士。カンボジアを代表する知識人で民主主義の提唱者。英国で難民として過ごした経験がある。プノンペンのクメール民主主義研究所の所長。

ボスニアの映画製作者エレナ・シラジッチさん。バルカン諸国からの難民の支援にあたる。

アルゼンチンのピアニスト、ミゲル・アンヘル・エストレージャさん。アルゼンチン軍事政権下で追放されパリへ逃れる。難民支援運動を推進した。



パンサン・コシェテル支援委員会制作

「アナン事務総長が私のことをどう考えたのかわかりませんが、とにかく荷造りをして、明日ニューヨークへ発ちます」

ルドルフス・ルベルス・オランダ前首相。国連難民高等弁務官に指名された時の最初の印象を語って

「AK47ライフルは彼らにとってクレジットカードみたいなものです。欲しいものが何でも手に入るのだから、使うのをためらいません」
赤十字代表。人道活動職員の安全を軽視する若い民兵について述べる。

「われわれ国連職員は、職員の安全についての予防・準備措置が、平和維持・構築活動の主要部分に組み込まれていないことに深い憂慮の念を抱いている」
最近発生した人道援助職員の殺害事件の後、数千人の国連職員が署名しアナン事務総長に提出

した請願書より

「私は谷で日暮れをむかえている。腰まである死体の山、血まみれだ」
ロメオ・ダレール国連軍司令官。1994年のルワンダでの大量虐殺の悪夢を思い起こして。

「これからは貧困に対抗し平和を求めろ戦いだ」
メレス・ゼナウィ・エチオピア首相。隣国エリトリアとの平和合意書の署名に際して

「新しいミレニアムになった。しかし我々はアメリカ開拓時代の先住民のようだ。ドラム缶でたき火をし、屋外で暖を取るのだから」
コソボからの避難民。セルビアの避難民受け入れセンターで。

「私がここにいるのは、女性が平和のために率先して大事な役目を果たしてきたからです。ところが、そうした努力は認められず、支持もされず、報われてもいません」
平和と安全における女性の役割

について始めて公式に行われた安全保障理事会におけるある代表の発言

「加盟国に対する我々のメッセージは明解ではっきりしています。もうたくさんです。我々は皆さんすべての代表として生命を救う活動しています。職員の安全を守る義務を怠ることは許せません」
キャロライン・マクスキー緊急援助調整官代理。アタンブアで殺害された犠牲者のための追悼式における演説から

「なぜ武器ももたず、罪もない援助職員がこのような残酷な方法で殺されなければならないのか。助けをどうしても必要とする多くの難民を援助するためにどれだけの危険を冒すべきなのか」

緒方貞子国連難民高等弁務官(当時)。UNHCR職員メンサ・クボンがギニアで惨殺された事件を知らされた時に。

「まるで壁が壊されてしまったようだ。だれもが標的にされる。飢えた人々に食糧を運ぶ職員、けが人を手当てる職員でさえも」
メアリー・ロビンソン国連人権高等弁務官

「歴史が我々に教えている。他に取りうる方法が尽きると人々と国は賢明になる」
ボリス・トライコフスキ・マケドニア大統領。10年にわたるバルカン地域での紛争が終了したことを祝う首脳会議で

